

気象台かわら版

国交省が今年度より保存活用に着手



創建時の趣きを残す階段室

内部には木製の階段も

平成十五年現在で、全国に残る戦前に建てられた単独気象官署は、十八件あり、そのうち横浜地方気象台は名古屋地方気象台（愛知県名古屋市中区大正十一年建設）地磁気観測所（茨城県新治郡・大正十四年建設）に次ぐ三番目に古い庁舎となっている。

大正十二年の関東大震災により庁舎が焼失してしまっただけで、その後、新たな観測所の建設予定地として現在地（旧米田海軍病院跡）を選び、昭和二年に落成した。設計を担当したのは神奈川県営繕管財課の技師であった繁野繁造で、設計当時は二十歳代前半であったといわれている。ちよとど当時は、現在キングの塔の愛称で親しまれている神奈川県庁本庁舎の設計も同管財課で進められていたことから、若手が抜擢されたことと想定される。



玄関にある親時計（左）と2階応接室（中）、山手の景観を特徴づける「ブラフ積み」と呼ばれるよう壁（右）

多用する様式建築から実用性を重視するモダニズムへ向かう流れがあったことから、「簡素実用と主とした」最新式の庁舎として当時の新聞で紹介されたように、両者が相まって鉄筋コンクリート造が好んで建設されるようになった時代の風潮がよく現れている。

ブラフ積みのような壁



全体としては簡素なデザインであるが、北西角に開く玄関とその上部の塔屋、玄関扉の金属装飾などにアールトデコの特徴を濃く表現している。また、内部においては一枚板で造られた階段の踏み板や手すり、床などいたるところに木材が使用され、どこか暖かみを感じられる。現在は取り外されているが、竣工当時、塔には時計が据えられており、そこに電気で時刻を伝達していた親時計が玄関正面に残されている。また、見尻坂に面した外部は高い石積みとなっており、これは山手地区に特徴的なブラフ積みと呼ばれる砂岩を長手短手交互に積み上げたものである。

気象台が立地する山手地区は、旧外国人居留地として西洋館や緑地等が多く残されており、歴史的な景観を保全し、文化的環境を生かした个性的なまちづくりが進められている。多くの洋館が公開されているほか、各種の資料館や美術館が存在し、多くの観光客が訪れている。



築山から見た横浜地方気象台

一方で、山手一帯は第一種低層住居専用地域に指定されている、横浜屈指の住宅地でもある。また、周辺には多くの

アールトデコ調の装飾



特徴的なデザインの玄関部分

多くの人の目に触れる風景の一部として認知され、平成十五年には横浜市登録歴史的建造物にも登録されている。しかし、設備機器の大部分が今日までに改修され、多くの配管が外部に露出して景観を阻害しているだけでなく、現在の庁舎は建設後七十年以上を経過していることから外壁の人工石洗い出し仕上げには、ひび割れが生じて既に剥がれ落ちていく部分があるほか全体的に剥落の危険性がある。内壁および天井についても大部分は漆喰仕上げ

築後七十数年を経てリニューアル

市登録歴史的建造物
学校が立地するなど文教地域としての性格も有している。
そのような丘の頂部に位置する気象台は、住民はもとより山手を訪れる



外壁に見られる数多くの補修跡



所狭しと機材が並べられた事務室

執務スペースが手狭に
位置し、気温観測などを行う露場（ろじょう）については、基準面積の半程度しかないものの周囲に高い建築物がないことなどから観測環境としては申し分なく、全国的にも非常にすばらしいデータが得られているため職員からは執務環境さえ改善されるのであれば、ここで観測し続けたいとの声も聞かれる。このように、立地条件からくる観測環境は良好であるが、気象台としての機能を十分発揮できないことや、災害時における活動を十分行えないことなど施設の不備が著しく問題となっている。以上のような状況を総合的に判断して、国土交通省では今年度より整備事業の設計に着手することとした。

平成十五年に実施した耐震診断によると、現状では一階部分を中心とした強度の不足とコンクリートの劣化により十分な耐震安全性を有していないと報告されている。また一方で、敷地南側



ともに昭和7年建設の彦根地方気象台（左）と前橋地方気象台（右）

横浜地方気象台建築データ	
所在地	神奈川県横浜市中区山手町9-9
敷地面積	2,496㎡
建築面積	271㎡
延べ面積	720㎡
構造	鉄筋コンクリート造
規模	地上3階地下1階（塔屋付）
建設年	昭和2年（1927年）
設計	神奈川県営繕管財課（繁野繁造）
外壁	モルタル+人工石洗い出し仕上げ

